とんぼのめがね

あきつ松風通信 第198号
2023.10.29

Date [ヘブル人への手紙の学び](2)　　臼井 勲

「天使に優る掛け橋キリスト」(ヘブル 1:4-14)

「御子が受け継いだ御名は、御使いたちの名よりもすばらしく、それだけ御使いよりもすぐれた方となられました。……御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣されているのではありませんか。」

ヘブル人への手紙の著者は、新約聖書中の三大神学者の一人と言われてきました。他の二人とは、パウロとヨハネです。ヘブル書がむずかしいと思われているのは、その神学的な論調のゆえであると思われます。先回の説教で、イエス・キリストはまことの神であり、まことの人間であることを、この作者は、イエス・キリストを神の栄光の輝き、そして現れと表現しました。それは神の光そのものであり、神の印章であることを学びました。今回は、御使い(天使)と比較して論じています。天使とはそもそも何でしょうか。皆様はどのように信じ、解釈しておられますか。旧約聖書には、ある時期から、天使が時々現われてきます。ダニエルが幻を見たとき「ガブリエルよ、この人にその幻を理解させよ」と呼びかけの声を聞いた。(ダニエル 9:21)。そして、天使の長ミカエルも出て来る。(ダニエル 10:21)。サムエル記には、しばしば、天使たちはケルビムとして出て来る。「ケルビムの上に座しておられる万軍の主。」(サムⅡ 6:2)。「主はケルビムの上に乗って飛び、風の翼の上に自からを現わされた。」(サムⅡ 22:11)。エリシヤの物語でも、アラム軍に包囲され、不安におののく若者の目を開かせ、天使の軍勢が町を守っていることを知らせる記事が出てくる。(列王Ⅱ 6:17)。なぜイスラエルの歴史に天使が現れて来るかと言うと、人々と神さまの関係が密で親しかった時代は天使は現れてこず、人々が神を深遠な聖なる存在として敬遠するようになり、人と神との関係に距離が広がると、その関係に橋をかける存在として天使が現れて来るのだと言われている。天使は人間と同じ人格を持つ被造物として創造されたが、人のように死ぬことはない霊的な存在であり、人を助け、守る役目を神に与えられていた。新約聖書には、クリスマス物語で、マリヤに受胎告知する天使、主イエスの復活を告知する天使として現われ、初期の「使徒の働き」では、ペテロを牢獄から脱出させる役目を果している。ですから、聖書が書れた時代の人々は、天使の存在を身近に信じていた。幼児や子供を守る守護天使を信じていたし、人の役目や働きに応じた多くの天使の存在を認めていた。また「万軍の主の軍勢」としての天使の群も信じていた。それが高じて、神さまよりも、身近な「天使礼拝」も多く行われていたと云う。天使には主に3つの役割があった。①に、神のメッセージを告げる預言者として。②に、人に寄り添い、相談にのるカウンセラーとして。③に、人と神との関係に掛け橋する仲介者。これは祭司の務めであるが、罪ある人間と聖なる神とは直接には近ずけない。その間を取りもつ仲介者の役目である。キリスト教がローマ帝国の国教になり、全ヨーロッパに広がっていった時、蛮族と呼ばれ未開の人々にとって、今までの雑多な神々でなく、唯一至高で、天上のかなたに在る神は近づきがたかった。その思いは、あのゴチック建築のカテドラルの天に向って垂直に伸びる建築様式に現れている。天上の神の御座は、彼らにとって憧れであった。

彼らにとって、より身近に感じたのは、幼児イエスを抱く聖母マリヤ像だったのだろう。元来彼らに土着していた女神信仰が触媒(しょくばい)となって、直接天の父なる神や主キリストに話すより母マリヤに話す、仲介者として天使の代りに、聖母マリヤ信仰へと傾斜して行ったのではないだろうか。

日本の隠れキリシタンが明治になって、永い250年の弾圧時代の後、長崎の新しく建てられたカトリック教会に現われ、神父に最初に尋ねたのは「みこイエスさまを抱くマリヤ様はどこですか？」であったと云う。それは大変な驚愕を世界に与えた。聖書もなく、神父もいず、隠れて、仏像の子を抱く観音母神像をマリヤ観音として聖母マリヤ像に見立て、礼拝することで、その信仰の灯をかろうじて保ち続けたのであった。僕が思うに、最初の日本伝道が、聖書と説教による礼拝のプロテスタントであったら、あの厳しい迫害の中を生き残れなかったかも知れない。マリヤ信仰が日本古来の母性信仰という通底があったためではなかったかと思う。マリヤさまが一種の天使の役割をしていたのではないか。この掛け橋的な仲介者の存在の卑近な例で言えば、結婚の仲人が思い浮ぶ。現代の結婚のほとんどは、男女本人同志の交際から発展する恋愛結婚が主であり、仲人など無用なもの、ダサイと言われそうである。僕らの頃は、まだ仲人式が主流で、僕もそうだった。もちろん本人どうしの交際によって決めたのであったが、紹介してくださった牧師や父の親友夫妻が仲人であった。今考えると、もし二人だけの結婚だったら、こんなに違った性格や好みが異った同志は、ここまで続かなかった気がしている。仲人がいて、懸け橋に両者に仲介者たちの掛け橋がかけられているため続いたと云う観がある。

その仲人の役を、主イエス・キリストが私たちと神さまとの間を取りもっていてくださると言うことだと思う。冒頭の箇所にも「昔は預言者たちによって語られたが、今や終りの時には御子によって語られる」とあったように、昔は天使によって、離れつつある天の神さまとの関係をかろうじて各々の時代、各々の方法によって仲介されて来たが、今や福音の時代が到来して、御子イエス・キリストが、天使たちより遥かに優る方法で、父なる神と罪人である人間の私たちに、御子であるキリスト御自身が私たち同等の人間となられて、罪のゆえにへだてられている深い断絶の溝を御自身の十字架の血潮のあがないによって埋てくださり、仲人となって、神さまとの縁を取り結ぶように仲介役を買ってでてくださったのである。そのことをヘブル書の記者は旧約聖書、おもに詩篇の中に預言されている例証をもって証明している。それは御子が天使より優れていることを明らかにしている。5～13節の箇所は、現聖書の下段の引照を参考にしてくだされば分るように、詩篇2篇7節（5節）。サムエルII 32:43（5節）。詩篇97:7（6節）。申命32:43（6節）。詩篇104:4（7節）。詩篇45:7-8（8節）。詩篇102:26-27（10節）。詩篇110:1（13節）。がそれである。かつてローマ・カトリック教会は、「天使が神に人の願いを伝え、神の答えを天使がまた人に伝える」というユダヤ教に代って「天使の代りにローマ教皇やカトリックの諸聖人等に代えました」。しかし、ルターやカルヴァンの改革者は、「そうではない、神が"今日、あなたを生んだ"という神の御子イエス・キリストに「それゆえ、神、あなたの神は、喜びの油であなたに油を注がれた。あなたに並ぶだれより多く」であります。これは主イエスのバプテスマの時に、「天が開け、"あなたはわたしの愛する子"と、天から声があった。」とあります。この主イエスへの祝福は、主イエスの神への仲介によって、主イエスをメシア（油注がれた者）と信じる、今日の私たちの上にも、喜びの油が溢れるばかり注がれており、「あなたに並ぶだれより多く」とあるように、「イエス・キリストに並ぶ者にされ「今日、わたしは、あなたを生んだ」と直接御子を祝福されたように、御子が直接父なる神に仲介の掛け橋をかけることによって、御子イエス・キリストを通して、神の赦しと恵みがじかに私たちにくださるのだ。」と主張したに相違ないのです。この信仰の確信の上に私たちは立っています。